繪本武者兵林

チ 4
940

子雜
940
卷

畫本武者兵林序

たゞ安社清世ふ出くく後を勢くく楽しむこと宝鞠社徳よあくくぞしてたんぞや見を用くく治る乗を武ふ行くぐして示ちん鉄や志う色ばを乗を盤う絵しくと勢

名ふ尊思つぐべきむや見を幼章う

幼くく多人ハ西をんくをんみハまじ

ゆく世小冊るぐくう教おるうとせんこを

姿の極を表んぐ多ぐふこをひくうば
失とうまうこゆを及ぶして我
日本の武徳をちとうめん国て北尾氏
小画図をこうう雪坑斎をを縁して
財をとうげ筆を反忽ホとてこのの
書をちゆせう其勢海うう生るがおとく
頭して武者兵林とこ云
寶暦甲戌初秋吉辰　浪華散人書

畫本武者兵林上

神功皇后　　平忠盛
源頼政　　諸葛孔明
刻原与一　　越後能景
午若辨慶　　巴女
景清　宗行　　那須與一

神后之韓をうんと
こうろざしまふは
大和のまま
いくさのひれをづ
松の枝をおく
逆ま地ふさて

吾敵の國をおろ
すべしとて松ずべし
のうまひしをこの
蒙くまる色をあらし
生き成りやうとまう
ゆくこと和生松ふしとて

上皇祇園女御へ志のびの御幸の時忠盛馬上ゆゝしく供をせられあやしきさまを一矢よ射とめんと矢をつがひしぶりし
仁徳天皇ふ
あしざるの時ハ
ふく
ふと
あじくうう
盛忠裏池ゑ

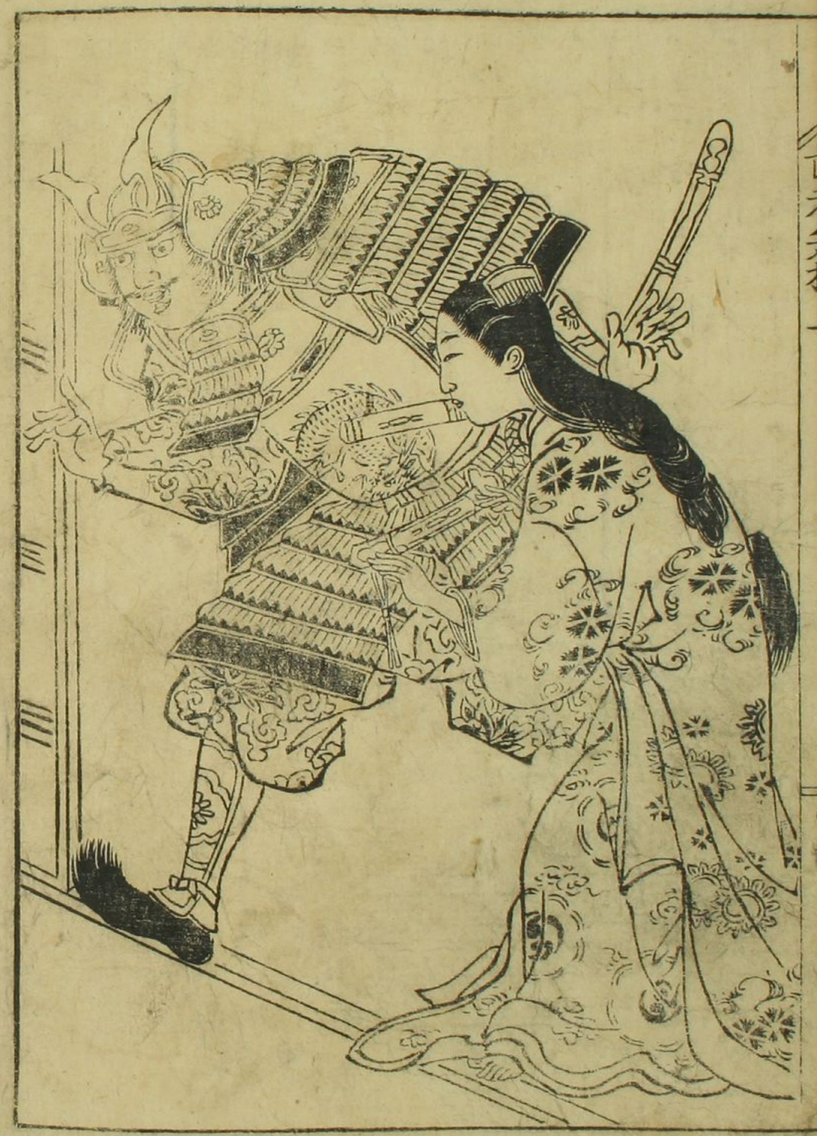
源三位
頼政
化物を
射ち

昂奇
猫又き

蜀の軍師孔明
仗智深姜維
を伏せしめ
こうるはる

丸帝は曹司奥秀平を
招きんと山科四郎くもり
のゝ下ゝ平家さもゝの
家ゝを一宗治より逆家郷
をと傾けゆさ
くゝのゝよゝ一が
るの踏揚のあ袖よ
さいとかゝくゝ色バ
振仰て流とれ
らゝでくるよを一
平家のさうんを
鼠ふみ磯と
まゝんで伯者
ゑ色バくゝ乳
たるそと

さんく西に
してそうう
ありてゆうゝ
うるとし
敷めさる
二うちこ手
うりぞとえ
しうこ手
ハ二のよあ
形しうう
くうこそ



本多義仲六條
河原合戦の日
高砂の女房の
ふる舞ふ立居
皆時をうりされそもバ
越後中将景
ト々るハ此歌既て
河原まで責べし
行ってお解そ
疾く疾くト
出ざりそもバ元禄場
やいやうじもさ命
元禄赤穂よりの社口おし
々也不給自害とすめんと果
あまりの世はものの山うく給
ト切と腹搔切死そうと

十八公家の
ゆとこそ

内田三郎家右
衛門ハ大関の
右ひりをるを己が
首を掻もぎる

関寺合戦の
時巴が出立ハ
むしゝさ紀隔ゐ
織付ゝる直垂ゐ
菊閉じ付
くゝ威の鎧ゐ入すの
右カ手袋の
矢とい連銭幕毛
のうまうのう
甲をめざて
額ゐ天冠
と尚て髪を

惡七兵衛景清
鞠引

こゝとのやゝ戸防
ともえ
小林新五宗行
ものゝ弦もこと

畫本武者兵林中

平維茂　北條氏綱
関羽　森蘭丸
武田信玄　秀吉
田路勘四郎
清水吉郎兵衛
遠山六兵衛

平維茂
とがくし山
の鬼神
さいご

北條氏綱ハ
伊勢新九郎
早雲の長子
伊豆國ヘ
攻入て
堅の
敵ごと

二人三人病ふて
壯なる者ハ皆
私をさけ逃
竄る我くハ
疫癘を病て
卜氏綱悩く
業をうへらまぬ氏
志を帰しくる

蜀は関羽ハ
故の毒矢よ
神醫華陀骨を
削て療治

碁を囲て

義経
義経は信長公の小性にて天性的勇敢
十六歳にして明智光秀を
うぢみまをさしうて所々に
ひいんしゝ傷へを受
濡弱こうして
つゆふさしゝ
的多ゞおゝ
殺をゝ

武田信玄信州表向
の付城一ヶ所あの砦よ
あり敵士ひしめきさわぐ中に
ひて先合戦勝利の吉例と
信玄先を賞ず

鉄炮をいくも地を折敷しゆみ伏せて
居らざる時ハ敵人窺ひ来る為
危うしと画りてあり

大閤秀吉御中こゝろゝく伝七
戦をしをもふりをかく
京都へ攻上りゝ或りを渉る
よ本佛の大黒流を為る副
星を為るゝを秀吉経刀を
拵ゝ二りよ切り大黒ハ
只千人を育佛と知ハ
門市悪しして
拵ゝゝ
天下を治る志つゝ

大國義鮮伝代の時衣笠宗無款よ命の四ろをて紀袖と拳て
衣笠が刀を纏くのくしくと撒ぐく二三歩の小児を握しくとく
小川の源也ま衣笠の刀をさしへくあとのさんこち力義義常
乃乃ぶ乗ひ行くぶかるホへ

田時綱冥帝地獄
迫りせて敵を衣袋
けふ斬教し衣笠を
ときけしくしくれり

武者絵掛中
寺沢志摩の亦士喜山六藤と
士をちらく人ふすぐれ
き天竺の大竹を
あるまて振り一ちめ
ちもしバ竹
ワしをを
ようくハ
片ぶて
ちぶ振ろう
ちれ

武者六枚口

清水ちからを射ハ加藤氏の家ちくし母ハ相模の国
ちくさ若ぎくる年の盛く成るつ
まり力ばくらのつくさ大力の名を
先近しく敵を討ち能ふしくる也
くくるび

畫本武者兵林下

諏訪畫女　松田康吉
梶原景季　新田義興
項羽　鎮西八郎
千賀五郎　巴　三大
時宗　義秀

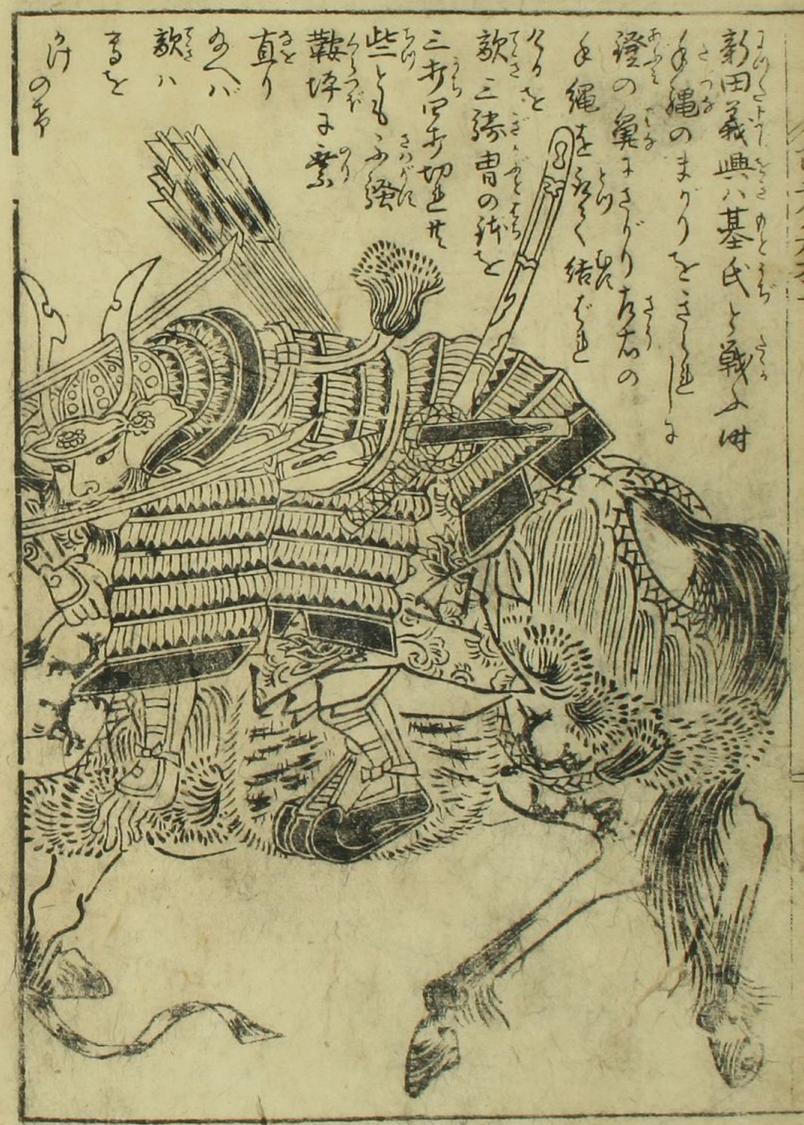
武田信玄乃入數

仁科晴信ハ
伊奈郡
高遠の
城を攻
給ふ
織田信忠
是を攻らる
時に晴信
家士諏訪勝右
衛門妻女長刀を
ふるひ敵を
数七人まで
薙伏せ

里見義
八犬士
うちまけ
里見忠
長坂弾正

十文字の槍
一張弓を
松田左京亮
蘆吉追分
くんで落
首をとる
ん
が花の
かく人いくさ力を
らてんとあめ
西は関大塚地
まつと首を奪
力及を首を討
へとりつしに出家
浮世と改
弟ひけ
越後国

梶原源太
新藤
梅とも桜ともいろ
歌ち繕と


新田義興ハ基氏と戰ふ時
ふ縄のまりをさし上る
澄の巣まさりたちの
ふ縄を強く結ぶと
敵三騎書の行と
三方写手切と共
些とも動ぜず
鞍坪ゑ乗
直り
ゆへば
敵ハ
るを
行の手

天晴大剛の者なると
ゆをふりかへてよげる

楚の
項羽、漢の
高祖と戰ひ
対まみ自害せん
とするを紅
の風ろ
呂馬童
とらんと者
数あり項
羽いろへの
あたれば
首をとる
者多くせ
しとも

呂馬童とそ也て西方ざまハ
項羽ゑび給ふ音をおしへ行ゑて
ちじ〳〵とるべし

鎮西八郎爲朝
鳴人を
ちらさぐへき

寺沢家より千賀五助と
いふ大力の士ありて正月二日
ゆきの有しを人喰る
虎と称ず
千賀
虎と
ならべて
絵ゝむるに
彼虎ハ千賀を
めがけ飛かゝるを
るの平頭をひつぶさ

推ふせ勝よ
馬副と指紙
虎と
ならま
さ絵
ける

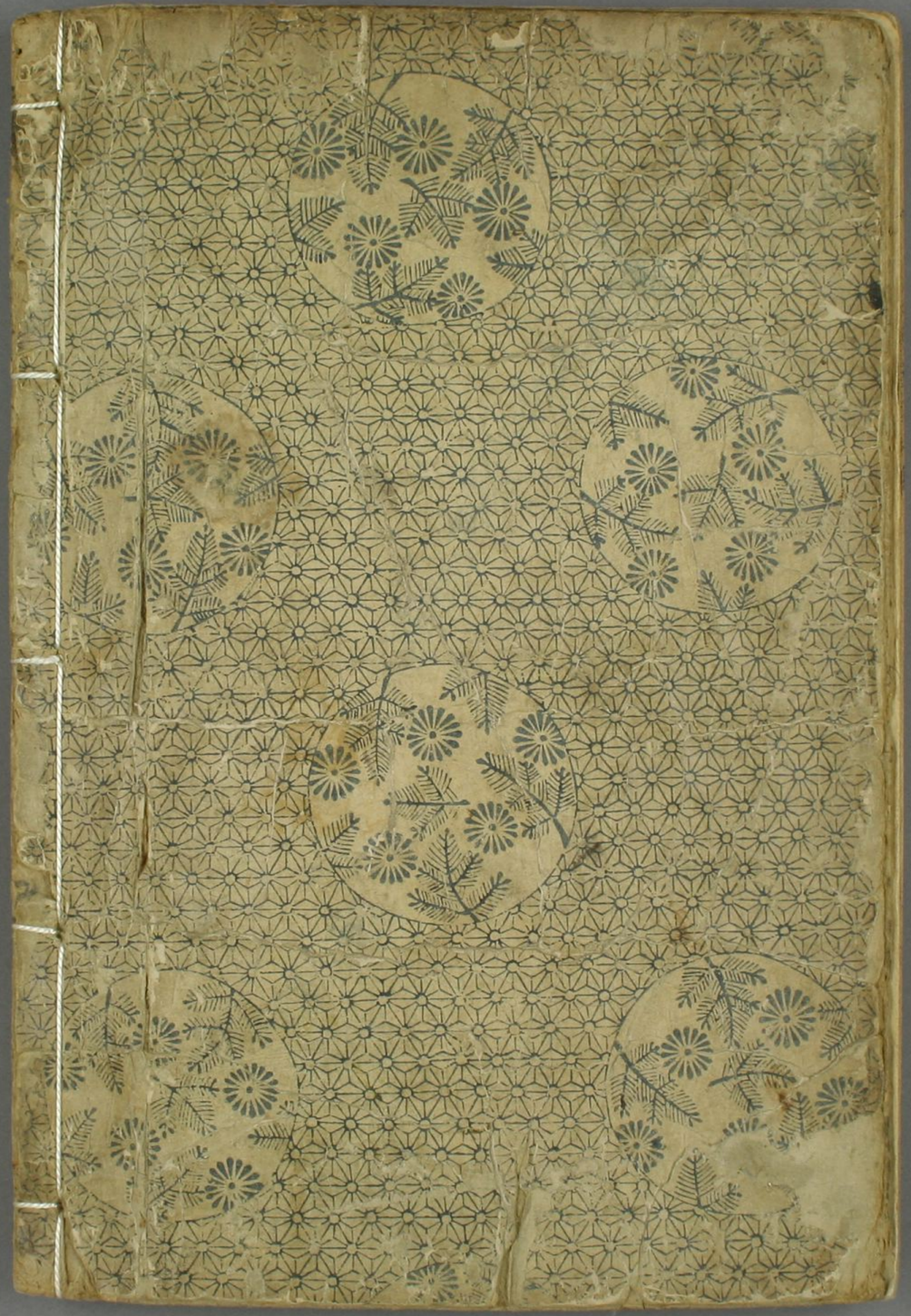
土佐坊昌俊
堀川の亭へ
押寄るや付
義経下知の
器三たを
めして
大江の
の直垂を
逆茂浮の後者を
ちろ〻鎧ハめりこめ
義のうま矢をえて
打ちり畏こをちり
收び歓を
射ん

曽我時宗
朝比奈義秀

檀畫　大坂周防町　北尾雪坑齋辰宣

彫工　同心齋橋筋　藤村嘉平次

寶暦四年甲戌仲冬吉日

浪華書林　心齋橋南一丁目　松村九兵衛

日之[illegible]